

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 6 月 8 日現在

機関番号：13501

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2021

課題番号：18K11751

研究課題名（和文）定常経済への移行と生活世界の変容：科学と物語の統合による全貌と詳細の解明

研究課題名（英文）The transition to a Steady-State Economy and Resultant Changes in the Lifeworld:
A Complementary Review of Scientific and Literary Works

研究代表者

金 基成 (Kiseong, Kim)

山梨大学・大学院総合研究部・准教授

研究者番号：70345700

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：定常経済（steady-state economy）とは量的成長に頼らず生態系の許容範囲内で良き生活が営まれる経済である。この概念については1970年代から社会科学分野で多くの研究が行なわれてきたが、定常経済への移行と生活世界の変容についてはほとんど解明されていない。その手がかりはむしろ文学作品の中から見出すことができる。定常経済における生活の質は生態学的に最適化された経済規模と資源配分、そして不平等の制限といった対策を通じて確保されることになるだろう。そのような社会における日常生活は、とりわけアーネスト・カレンバックが小説『エコトピア』で描き出した情景に似ているであろう。

研究成果の学術的意義や社会的意義

定常経済という概念の歴史は浅くない。それは、1970年代に隆盛を極めていた「成長の限界」という考え方の流れを汲んでおり、隣接の学問分野にも大きな影響を及ぼしてきた。その一方で、定常経済への移行に伴う生活世界の変容に関する研究は未だに萌芽的段階にある。この研究は、定常経済に関する研究の焦点を、一般原理から移行過程へ、そして生活世界の変容という動的次元へと移すことによって、前述のような空白を埋めようとするものである。さらに、研究の射程を文学作品にまで拡張することによって、定常経済という理論的概念を、どこかに存在しうる想像上の事例として再構成していることも、本研究の新しいところである。

研究成果の概要（英文）：A steady-state economy (SSE) denotes an economic system that ensures the ecological sustainability of constant throughput levels, indefinitely enhancing the quality of life. Radical discourses on sustainable society have attended focally to the concept of SSE; however, scientific discourses do not detail changes effected to the daily lives of people. This study adopts a two-fold objective: first, to broadly overview the process of transitioning to an SSE, and second, to answer how the lifeworld would change through such a process. The study outcomes suggest that people living in an SSE would lead an ecologically stable life based on an ecologically optimized economic scale, an ecological rethinking of efficiencies in resource allocations, and the alleviation of inequalities. Social science has not detailed such anticipated changes. Instead, works of environmental literature can offer clues, particularly Ernest Callenbach's novel, which vividly depicts the anticipated transformations.

研究分野：政治学（政治理論、環境政治）

キーワード：定常経済 エコロジー経済学 環境文学 環境政治学 エコトピア ユートピア 持続可能性 持続可能な社会

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

定常経済の一般原理とその実現のための諸条件を明らかにすることは、社会科学におけるエコロジックな転回に取り組んでいる研究者にとっては、避けては通れないテーマの一つであった。その一方で、定常経済への移行とそれに伴う生活世界の変容については十分な研究の蓄積があるとは言えない。このことは、定常経済に関する研究における大きな空白として残っている。さらに、ディシプリン上の制約もあって、そもそも社会学者に、まだ実現されたことのない定常経済の社会について、その日常生活の細部に至るまで説明してもらおうと期待することそのものにも無理がある。幸いにも、このような空白はグリーン・ユートピア文学の成果をもって埋めることができる。この研究で、社会科学と文学といった異なる分野のテキストを相互補完的に読解するというアプローチを用いることになったのは、このような理由からである。

2. 研究の目的

本研究は、社会科学および文学分野のテキストを補完的に読解することによって、定常経済への移行過程とそれに伴う生活世界の変容を詳細に描くことを目指している。目的は三つあった。一つ目の目的は、定常経済に関する社会科学分野の研究動向を把握することを通じて、定常経済への移行過程の全貌を概観することである。二つ目の目的は、定常経済が実現された社会における生活世界を想像してみるための手がかりを、1970年代以降のグリーン・ユートピア文学の作品の中から探し出すことである。そして三つ目の目的は、前述の研究を通じて得られた知見をパーツとして用いながら、定常経済への移行過程と生活世界の全体像を組み立ててみることである。

3. 研究の方法

この研究は基本的に文献研究によって行なわれた。文献研究は次のような段階を踏んで進められた。第一に、1970年代以降の急進的な環境言説の特徴について検討を行ない、それらの言説は共通して「生態学的定常状態」、そして「経済成長の限界」といった考え方に基礎をおいていることを明らかにした。第二に、同時期におけるグリーン・ユートピア文学作品を調べることを通じて、定常経済に関する社会科学の研究と文学作品の間に想像力における共振関係が見受けられることを明らかにした。第三に、以上のような研究によって得られた知見を組み合わせることによって、定常経済の移行と生活世界の変容の全体像を把握した。

4. 研究成果

こうした研究から得られた成果の一部は関連学会の場で公表されている。その概要は次の通りである。

(1) 定常経済という概念は成長の限界、地球扶養力、社会正義といった考え方に基礎を置いている。これらの考え方は1970年代以降の急進的な環境言説に共通しているものでもある。その歴史からすれば、定常経済という概念は、一方では前述の急進的な環境言説の影響を受けながら、他方ではそれらの言説に多大な影響を与えてきた。こうして形成された定常経済論は、今日の持続可能な発展という概念を省察的に再構成する作業、とりわけ、その意味を現状維持という意味へと形骸化させない上で、欠かせない視座を提供している。(引用文献 およぼ を参照)

(2) ところが、大学という教育の場においてさえ、定常経済は未だに疎い概念である。このことは、本研究課題の研究期間中に行なわれた試験的な調査によっても明らかになった。調査対象となったのは本研究者が担当している環境政治論という授業の受講生だった。彼らは文理融合型学部2年生で、文系と理系が半々くらいであった。調査結果によれば、定常経済という概念について知っていた人はほとんどいなかった。その一方で、授業を通じて定常経済の考え方に触れたことに対しては、ほとんどの人が肯定的に評価していた。実現可能性については懐疑的な意見の人もいたが、関連文献を読んでレポートを提出した人の約75%は、生存のためには定常経済への移行が必要だという意見を述べていた。小規模の調査だったので一般化に無理はあるが、こうした調査結果は、定常経済という考え方を取り巻く厳しい現状を表わすものである。と同時にそれは、定常経済に関する教育は持続可能な社会に関する想像力を刺激する可能性がある、ということを示すものでもあった。(引用文献 を参照)

(3) さて、定常経済に関する考え方を社会一般に広く理解してもらうためには、定常経済という理論的概念を、実現可能性の高い、しかも現実味のある物語として再構成する必要がある。物語としての再構成に長けているのは科学という分野よりは文学という分野である。その中でも

特に、グリーン・ユートピア文学の作品は日常生活上の具体的な情景の描写に優れている。とりわけ、アネスト・カレンバックの小説は、その執筆動機からストーリーラインおよびディテールに至るすべての点において、定常経済の小説と言える。彼が描いたエコトピアの日常生活は、定常経済の一般原理、すなわち一つしかない地球生態系のサブシステムとしての経済、人口および資源消費の生態学的最適化、資源配分効率性の生態学的再考、不平等制限の強化、といった理論的観点と矛盾していない。さらに、それらの原理は文学的想像力を通じて肉付けされ、蓋然性の高いディテールからなる一つの物語として見事に再現されている。こうした共振性は、定常経済論と環境文学の間における相互補完的な読解の可能性を示唆するものであり、定常経済に関する討論をより一層深めていく上でも役に立つ。(引用文献 および を参照)

(4) この研究課題の研究期間中に、世界はコロナ禍に見舞われた。そして、我々人類は突然、ポストコロナ社会に相応しい新しい日常のあり方を模索する必要性に迫られた。その新しい社会のイメージは、定常経済への移行を完遂した社会のそれと近似している可能性が高い。第一に、科学的知見によれば、パンデミックの近因は人獣共通感染症を引き起こすウイルスだが、その根本原因は、森林破壊や乱開発によって、野生動物とヒトの生態学的距離が近づいてきたということにある。第二に、ヒト社会における過密の状況もパンデミック発生に拍車をかけている。要するに、パンデミックを根本的に予防するためには、野生動物とヒトの生態学的距離を元の状態に戻すとともに、ヒト社会における過密の状況を解消しなければならない。それはつまり、定常経済の社会への移行を意味する。果たしてそれは実現可能であろうか。そのような社会において、ヒトは幸せであろうか。このような問いに対して、定常経済に関する言説は肯定的な答えを示唆している。そのような社会は多くの点で、カレンバックが描いたエコトピアという社会の情景に似ているであろう。(引用文献 および を参照)

<引用文献>

金基成、「Sustainable Development における意味の競合とその ESD への示唆」、日本 ESD 学会第 1 回大会、2018 年 8 月 18-19 日。

金基成、「持続可能な発展概念の多様性に関する批判的考察 ベーカーとコネリーとホップウッドによるモデル理論を事例に」、『ESD 研究』、2 号、2019 年、13-22 頁。

金基成、「定常経済の観点から見た持続可能な発展 大学での教育実践と受講者の反応」、日本 ESD 学会第 2 回大会、2019 年 8 月 19-20 日。

金基成、「定常状態の経済という観点から読む『エコトピア』」、第 27 回 ASLE-Japan / 文学・環境学会全国大会、2021 年 8 月 28 日。

Kiseong Kim, "Re-reading ECOTOPIA in the COVID-19 Pandemic Era," The Seventh International Symposium on Literature and Environment in East Asia (ISLE-EA), October 24, 2021, pp. 23-24.

金基成、「コロナ禍、距離、エコトピア」、『文学と環境』、25 号、2022 年、59-60 頁。

金基成、「生態学的定常状態の経済という観点から読む『エコトピア』」、『文学と環境』、25 号、2022 年、29-37 頁。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 金基成	4. 巻 2
2. 論文標題 持続可能な発展概念の多様性に関する批判的考察 ベーカーとコネリーとホップウッドによるモデル理論を事例に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 ESD研究	6. 最初と最後の頁 13-22
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金基成	4. 巻 25
2. 論文標題 生態学的定常状態の経済という観点から読む『エコトピア』	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文学と環境	6. 最初と最後の頁 29-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金基成	4. 巻 25
2. 論文標題 コロナ禍、距離、エコトピア	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 文学と環境	6. 最初と最後の頁 59-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 金基成
2. 発表標題 定常経済の観点から見た持続可能な発展 大学での教育実践と受講者の反応
3. 学会等名 日本ESD学会2019年度大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金基成
2. 発表標題 Sustainable Developmentにおける意味の競合とそのESDへの示唆
3. 学会等名 日本ESD学会2018年度大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金基成
2. 発表標題 定常状態の経済という観点から読む『エコトピア』
3. 学会等名 第27回ASLE-Japan / 文学・環境学会全国大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kiseong Kim
2. 発表標題 Re-reading ECOTOPIA in the COVID-19 Pandemic Era
3. 学会等名 The Seventh International Symposium on Literature and Environment in East Asia (ISLE-EA) (国際学会)
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------